

研究・調査報告書

報告書番号	担当
43	滋賀医科大学社会医学講座公衆衛生学
題名 (原題/訳)	
Prevalence and correlates of alcohol and other substance use disorders in young adulthood: A population-based study. 若者におけるアルコール及び他の物質依存症の有病率と関連について：集団ベース研究	
執筆者	
Latvala A, Tuulio-Henriksson A, Perälä J, Saarni SI, Aalto-Setälä T, Aro H, Korhonen T, Koskinen S, Lönnqvist J, Kaprio J, Suvisaari J	
掲載誌 (番号又は発行年月日)	
BMC Psychiatry. 2009 Nov 19;9:73.	
キーワード	
物質依存症、要因、生涯罹患率、アルコール	
要旨	
<p>背景： アルコールと他の物質依存症(SUDs)のリスク因子が知られているが、それらの SUDs との関連は互いに独立であるかについてはよくわかっていない。</p> <p>方法： 住民ベースの総合的な精神健康調査がフィンランドの若者(21歳から35歳、605名)を対象に行われた。物質依存症を診断するにあたって構造化面接(SCID-I)と入院及び外来治療記録を用いた。生涯における DSM-IV で診断される物質依存症の頻度を推定した。さらに、4つの要因；(1)行動・感情要因、(2)親の因子、(3)依存性物質への早期の暴露、(4)教育要因と物質依存症との関連について検討した。また行動・感情要因と他の因子が独立して物質依存症と関連を示すかについても検討した。</p> <p>結果： すべての物質依存症、アルコール依存症、違法薬物依存症の生涯での頻度は順に 14.2%、13.1%、4.4%であった。4つの因子すべては物質依存症との関連を認めた。行動と感情因子(学校時代の注意あるいは行動問題、攻撃性、不安)と物質依存症は他の要因とは独立していたが、日常の喫煙と低学歴と物質依存症は行動・感情要因を調整しても関連を認めた。</p> <p>結論： アルコール乱用はフィンランドの若者の間では一般的であるが、他の物質依存症はほかの先進諸国と比較してあまり一般的ではない。クロスセクションの解析では行動、感情因子と物質依存症との関連は早期の依存性物質の使用や両親のアルコール問題などのたの要因の一部分を占めるに過ぎないことを示唆している。一方で、他の多くの要因と物質依存症との関連は行動、感情要因を調整すると有意な関連を示さなかった。</p>	